

## たじみん昼話 25

### 信念の伝達は難し、されど流れ星を作る！

流れ星に対しては、「見えている間をお願いを言い切ると叶う」との噂を実行して、言い切れずに口惜しい経験をした人も多いかもしれない。その真偽はさておき、2020年、その流れ星を見る機会が増えるかもしれない。それは「人工流れ星プロジェクト」が、最終段階に入ったからだ。このプロジェクトは、2008年のリーマン・ショック時に、入社1年で退職を余儀なくされた人が起業した事業だ。この事業が凄いのは、プロジェクトが進むにつれて様々な専門家が、創業者の起業理念に共感して雪だるま式に参加を表明し、巨大な事業集合体として事業が進んでいることだ。まさしく、現代版ワンピース事業だ。

流れ星の正体は、宇宙空間に漂う数十ミクロンから数ミリの微小物質だ。これが大気圏に突入して空気との摩擦で明るく光ることで流れ星となる。その速度は秒速300mにも達する。こう解説すると流れ星が光るのは単純そうだが、その原理は非常に複雑で、実はその明るさの理由もわかっておらず、実験でも正確に再現できていないのだ。したがって流れ星を作ることは相当困難なことだ。

人工流れ星の材料は金属の粒だ。これが大気とぶつかって発光し燃え尽きるまでが発光時間となる。成功のカギを握るのは、衛星と金属の粒とその粒を放出する技術だ。直径1センチぐらいの物体を人工衛星からポトンと落としても、肉眼では見えない5等星ぐらいにしか光らない。目標はその100倍ぐらい、所謂マイナス等級の明るさだ。

この事業は技術的な壁が高く様々な専門家が必要となる。プラズマを扱える技術、放出速度秒速300mを誤差1%で達成する技術、過酷な宇宙空間での耐久性を確保する工作技術等……。とにかく様々な技術が必要となる。

「どの技術が難しかったか」との質問に対して起業家は、「技術集めより組織を作ることが難しかった」と答えている。そして、「集団が巨大化するにつれ、方向性を示しビジョンを明確に伝えることがどんどん難しくなった。ここが一番苦勞した点だ。伝えたことに小さなズレがあると、計画が進むにつれて次第に大きくなるからだ。みんな同じ方向を向きながら、自分がより成長しないといけない部分を毎日突きつけられて大変だった。でも、苦しさの中で、ここが足りてないなとか、こういう方向がよかったとか、いろいろ学びがあって今は喜びしか記憶にない。みんなで作りに上げることの凄さ、信念が伝われば、人はこれほど動いてくれることの素晴らしさがわかったことが宝物になった。」と語っている。

**チーム多治見高の信念は?新しい教育目標に掲げている。力を合わせてこの苦難を乗り越えよう。**